

# 生物季節観測の縮小、 農家も参加して新しい形に

古川武彦

リレーエッセイ ● 149

**私**たちの周りには、さまざまな生き物が自然の環境に適応しながら生きています。人々は春が近づくとウメの香りを求め、ウグイスの声に耳をそば立て、春の日和にサクラを愛で、夏にセミ時雨を浴び、そして秋には紅葉狩りと、季節の移り変わりを五感で感じて暮らしてきました。

気象庁では、このような植物や動物の季節ごとの変化（遅れや進み）、気候の違いなどを総合的に知るために、1953年（昭和28年）に「生物気象観測指針」を定めました。指針に従って始まった「生物季節観測（植物季節観測と動物季節観測）」は、全国の気象台・測候所58地点で植物34種目、動物23種目を対象に行なわれてきました。植物では「標本木」と呼ばれるサクラやモミジなどの開花や紅葉など、また動物ではウグイスの初鳴きなどを職員が目視で観測し、その結果を「生物季節観測原簿（紙）」に記載し、併せて観測電報として気象庁に届けています。気象庁ではそのデータを整理し、「気象業務支援センター」を通じて、有料で公開しています。

筆者は駆け出しの頃、大阪府や潮岬（和歌山串本町）で気象観測の傍ら、生物季節観測にも従事していました。後年には気象庁観測部や札幌管区気象台でこれらの管理にも携わりました。半世紀以上前に始まったこれら観測の資料は、今日まで気象関係者のみならず、農業や環境保全に関わる人に広く使われてきました。農家にとって

は、品種の選択、作付けや収穫時期の判断に活用できる資料でした。

ところが気象庁は、今般その見直しを行ない、本年1月1日より観測対象の縮小と廃止をしました。近年、気象台・測候所周辺の環境が変化しており、植物季節観測において、適切な場所に標本木を確保することが難しくなりました。また、動物季節観測においては対象を見つけることが困難となってきた、というのが理由です。

その結果、対象を絞って、動物の観測は廃止。ウグイスやセミの初鳴きなどは今後、記録されなくなったということです。植物季節観測も対象を減らし、アジサイの開花、イチヨウの黄葉・落葉、ウメの開花、カエデの紅葉・落葉、サクラの開花・満開、ススキの開花の6種9現象のみとなりました。植物と動物を合わせると、約9割の対象削減です。

**生**物季節観測の業務化の背景には、速く戦前の昭和初期に遡って、いくつかの自然災害があります。一つは、34年（昭和9年）に東北地方を襲った記録的な冷害です。原因は、三陸地方沿岸域で梅雨時期に「オホーツク海高気圧」から吹きたす冷たい北東風。内陸へも深く侵入し山背と呼ばれているものです。もう一つは同年9月に関西地方を襲った「室戸台風」が、家屋の倒壊など、国内に大きな衝撃を与えたことです。

当時の中央気象台は、このような冷害や台風の原因究明と対策のためには、気象および海洋の観測体制の拡充・強化が急務と考え、37年（昭和12年）に1200tの海洋観測船「凌風丸」を建造。気象はもちろん、海面水温や海中深くの水温、さらに海流の観測をする船です。私事になりますが、筆者は60年（昭和35年）の夏、初めてこの凌風丸に乗り、本州東方海域の定期観測に従事しました。船酔いに悩まされながら、ふと舷側に数cmの穴を発見し先輩に聞いたところ、戦時中、南方海域の補給のため海軍に徴用されて活動中に、敵機の機銃掃射を受けた弾痕だと聞き、歴史を垣間見

# 意見異見

ふるかわ たけひこ  
1940年、滋賀県生まれ。理学博士。気象庁研修所（現、気象大学校）および東京理科大学卒、気象庁気象研究所、予報課長、札幌管区気象台長などを歴任。著書に『気象庁物語 天気予報から地震・津波・火山まで』（中央公論新社）、「天気予報はどのようにつくられるのか」（ハレ出版）など。現在は「気象コンパス」（ホームページ）を通じて、気象の啓蒙活動中。

